

中華革命党結党時における孫〓黄決裂の意味について

高橋良和

はじめに

本稿は、辛亥革命以降南京国民政府成立に至る間の、中国ブルジョワ革命派の「変容」の研究の一環である。同盟会に結集し、共和国建国をめざしたブルジョワ革命派は、辛亥革命という一大政治変革をなしたとげた。が、彼らは自らの生み出した共和国の政治を担当し得ず、さらなる変革を推進できなかつた。ブルジョワ革命派は共和国の実権を掌握するため様々な模索を展開した。その最も中心的な指導者であった孫文は、一九二四年に至って国共合作体制（第一次）を構築し、ブルジョワ革命派をして所謂国民大革命の展開に当たって積極的な役割を担わしめた。しかし乍ら、孫文の死後、ブ

ルジョワ革命派の多数を占めていた「右派」「新右派」グループは、この合作体制を崩壊させ、南京国民政府を樹立して、革命の主導権を確保し、さらに共和国を自らの支配下に置いた。

辛亥革命以降、ブルジョワ革命派の「変容」には著しいものがある。それは、運動の方向、組織の方法、提携の対象、変革の理念等あらゆる方面にわたる。しかも二十年にも満たない短期間（一九一一年～一九二七年）になされているのである。こうした「変容」が南京国民政府の成立という形で終結したのは何故であろうか。このことは、中国近現代史の上でどのような意味をもつのであろうか。ここに私の究極的な問題意識がある。

本稿においては、これら一連の「変容」の起点である民国

成立後のブルジョワ革命派の動向、とりわけ第二革命敗北後革命運動の再建方法をめぐって対立決裂した二人の重要な指導者孫文と黃興に焦点をあて、両者の対立・決裂の意味するところを考察する。

一

民国成立後のブルジョワ革命派の動向について論じられたものは、通史的なそれを除くと極めて僅かである。殊に袁世凱が臨時大總統に就任し臨時政府が南京から北京へ遷って以降については殆ど論じられることがない。袁世凱に政権を譲りわたした時点で中国のブルジョワ革命派は、歴史上無価値な存在となってしまったのであろうか。

民国成立以後、五・四運動時期までのブルジョワ革命派の動向の概要は以下の如くである。

一九一二(民国元年)年 南京臨時政府成立。孫文臨時大總統に就任。袁世凱への政権移譲。同盟会の改組、公開化。

国民党への改組。

一九一三(民国二年)年 第一回総選挙。宋教仁暗殺。第二革命の勃発及び敗北。中華革命党組織準備。袁世凱によ

る国民党解散令。

一九一四(民国三年)年 孫文と黃興の決裂。中華革命党、歐事研究会成立。

一九一五(民国四年)年 対華二十一カ条要求問題及び帝制問題発生。第三革命勃発。

一九一六(民国五年)年 陳其美暗殺。袁世凱死亡。国会復活、南北宥和。黃興急逝。

一九一七(民国六年)年 南北決裂。孫文広州に非常国会を召集(第一次護法運動)。

一九一八(民国七年)年 第一次護法運動失敗。孫文上海へ隱棲。『孫文学説(心理建設)』なる。孫文、レーニンへ祝電。

一九一九(民国八年)年 五・四運動興起。中華革命党改組し中国国民党と改称。『星期評論』『建設』の発刊。

このように、民国成立以降のブルジョワ革命派には、五・四運動に刺戟を受けるまでこれといった成就是なく、むしろ敗退と失敗のみが目立つ。しかし、だからといってこの時期が彼らにとって全く意味のないものであるということにはならない。私はこの時期のブルジョワ革命派に対し、次の二つの点で注目すべきであると考える。第一には、ブルジョワ革

命派が辛亥革命の成果の喪失という現実を直面して、どのような対処を図り、どのようにして従前の体制からの脱皮を図っていったのか、を見ることによって、やがては「連ソ容共」政策を受容し国共合作を断行するに至ったブルジョワ革命派の側の主体形成の過程が明らかになると思われるからである。第二に、この検討を行なうことによって、国共合作体制を構築しながら、合作体制の放棄、蒋介石軍事独裁政権の成立という結末を導き出したブルジョワ革命派のもつ構造的特質の問題に一定の解答が与えられると考えられるからである。

これまで民国成立以後におけるブルジョワ革命派への論及が少ないのは、一つには、辛亥革命の成就と続く敗退とによって彼らが歴史上の「先進」としての役割を終えた、と無意識的であるにしろ見做されたためであろう。同時期に始まる「新文化運動」に対する論稿の多彩な充実を蓋し多分にそれが当時の「先進」であり新時代を拓くものであったが故に關心を寄せられてのことと思われる。今一つには、最近石田米子氏が総括されたように、辛亥革命を人民闘争史ととらえることが研究者の主流となってきたことによる。勿論石田氏も多くの例を挙げておられるように、この視点に基づき多くの論点が提出され、成果を得てきたことは確かである。が、

反面、ブルジョワ革命派そのものに対する考察が必らずしも十分とはいえなかったことは指摘しておく必要がある。⁽²⁾事実、辛亥革命以後のブルジョワ革命派の動向についてふられる場合でも、それは殆ど立憲派及び袁世凱に相對する形での、総体としての革命派であって、「革命派」と一括される諸派個々の有つていた政治構想の内容及び特質、それら各派間に発生した諸關係及びその影響等にまで分析を行なっているものは少ない。革命派は「革命派」と一括するには余りに多様な存在であり、一括して把えることは状況の把握にある種の欠落を生む結果にならないだろうか。

民国成立後の革命派の内側を分析した論稿としては、中村義氏の「南京臨時政府とその時代——宋教仁・胡漢民論争を中心にして——」⁽⁴⁾が先ず挙げられよう。中村氏は、一九一二年早々の同盟会大会に於て展開された、宋教仁と胡漢民による中央集権制か地方分権制かをめぐる論争を通して、当時の同盟会の向おうとしていた方向を抽出し、併せてそこに辛亥革命挫折の一因を見出そうとする。

久保田文次氏の「辛亥革命と孫文・宋教仁——同盟会の解体過程——」⁽⁵⁾は、従来個別分析のなされていなかった宋教仁に関してその政治路線の内容と構造とを明らかにし、さらに

は宋教仁とその路線とが同盟会内部に於て、また辛亥革命の行方、民国初年の政治動向に於て、どのような影響をもたらしたのか、を説明する。

二論文がともに主眼とするところは、何れも、民国成立の後何故革命派は敗北したのかという点の解明にあると思われる。そのため両氏は同盟会内における様々な政治方向を有った派の存在、とりわけ孫文と相反する政治プログラムを有っていた宋教仁派に着目して、そのプログラムを分析しうえ彼らの限界を明らかにし、一方宋派に対する孫文派の対応をみることによって孫文派のもつ限界をも浮き彫りにしている。そして、これらの限界の故に辛亥革命は敗北せざるを得なかったという結論に導かれる。従って両氏は、辛亥革命の成果を喪失した後のブルジョワ革命派の中に必らずしも積極的意義を認めておられない。その意味では、革命派そのものに踏み込んでいるとはいえず、前述の民国成立後のブルジョワ革命派軽視の第一の要因から解放されていない。

この意味で注目すべきは、第二革命敗北後のブルジョワ革命派に積極的意義を見出している論稿である。

寺広映雄氏の「中華革命党と孫文思想の形成について」⁽⁶⁾は、従来消極的にのみ扱われ、全体としてマイナスの評価し

かなされて来なかった中華革命党について、その積極的側面を見出そうとした。即ち、中華革命党こそは辛亥革命の失敗という現実を前にし、革命の再構築を圖って孫文が結成したものであって、多くの欠陥は存在するにしても、この結党に際して発表された孫文の革命構想は従来に比べて、より整備され前進したものになっている、として、中華革命党時代の、孫文の思想的展開の中における重要な意味を指摘する。即ち氏は孫文が同盟会当時に比べて、革命後に於ける革命党及び革命黨員の占める役割を大きく認め、両者の革命における指導権を強調したこと、のちの「以党治国」の原型がみられること、孫文の新政府構成の基礎にある五権並立論がより具体化され、中華革命党自体の構成に五権並立のモデルを見出せること等を挙げる。氏はこのことを通じて、後の中国国民党・国共合作時代のかげ橋としての中華革命党時代の位置づけを行なっている。残念なことに論稿自体は極めて短いもので詳細な実証を伴うものではないけれども、寺広氏の提出された視点は、十分に吟味し考察を加えるに値するといえよう。

藤井昇三氏の「孫文と中国革命の思想——「心理建設」を中心として」⁽⁷⁾は、孫文が、中華革命党による革命運動及び第一

次護法運動失敗後、隱退中の上海で書いた『心理建設（孫文学説）』をとりあげ、この中で孫文の思想が大きな転換をとげていることを明らかにする。氏によれば、孫文が同書中で展開している「知難行易」の説は、彼が従来のような軍事的蜂起にのみ拠って展開してきた革命の方法に対して根本的に反省を加え、「国民の精神革命」を含んだ民衆の啓蒙と動員へと関心がうつってきているとし、一九一八年から一九年という時点に於て孫文の側に新たな時代への対応が見られるとする。

寺広氏は中華革命時代に孫文の革命構想に大きな展開が生じた点を指摘され、藤井氏は『心理建設』執筆時期に孫文の運動方法論に大きな転換が見られる点を主張される。しかし何れにしろ、辛亥革命の成果を喪失した後、五・四運動時期にかけて、ブルジョワ革命派に従前の失敗を総括し、後の時代につながる自己革新の試みがなされていると認める点は共通している。この自己革新の故にブルジョワ革命派は体勢をたてなおし国民大革命時代に対応することができた、と両氏は見做している。孫文が試みたこれら一連の自己革新こそ、ブルジョワ革命派「変容」の推進力であった。

この「変容」は、どのように展開されていったのか。それは歴史的にどのように位置づけられるものなのか。残念乍ら、

これらの点については、その後殆ど深められていない。藤井氏も述べているように、こうした「変容」の結果、孫文の第一次国共合作への道がひらかれる。従って、このようなブルジョワ革命派の「変容」を見ることなしに第一次国共合作を把えようとするのは、国共合作というものの把え方、広くは統一戦線というものの把え方の偏り或は誤まりを生み出しているのではないだろうか。

私は、民国成立後にブルジョワ革命派の見せる一連の「変容」は、彼らが自らの挫折を悟り、苦悩し、再生をめざして模索する過程である、と考える。この模索の出発点となったのは、彼らが辛亥革命を導き出した同盟会である。同盟会を母体に展開された辛亥革命は、第二革命の敗北という形でブルジョワ革命派の敗退に終わった。従って革命運動の再興・再構築を図るとすれば、敗退に結びついた同盟会に拠った従前の活動（今仮にこの形態を「同盟会体制」と称する）の徹底的な総括が求められる。この総括こそ革命運動再建の母体となるのだが、その過程でこの総括の方法、内容をめぐって革命派内に激しい対立、衝突が起こった。この激しい衝突を代表するのが、孫文と黄興という二人の同盟会以来の中心的指導者の対立・訣別である。運動再興のために新党（中華革

命党)を組織しようとした孫文に対し、黄興をはじめとする多くが反発・抵抗を示した。この対立は遂に収拾されず、黄興は孫文と袂を分かち孫文の方針に異を唱える人々は別に歐事研究会というグループを組織して独自の活動を展開することになった。

中華革命党成立時における、この孫||黄対立については、これまで言及されることは間々あっても、ともすれば後述の中華革命党への入党手続にまつわる形でのみ取りあげられてきたきらいがあるが、これは重要な史料である当時の関係者の回憶類が入党手続の問題にかなりのスペースを割いていることにも因る。それだけ孫文の提出した条件が当時の人々にとっては衝撃的であったわけである。しかし先述の如く中華革命党の結党は、革命運動の再建を志す孫文が、従前の活動に徹底的な総括を加えた結果として、敢えて打ち出した計画である。手続上の問題にとどまるべきものではないし、方志欽の如くブルジョワ革命の行き詰まりの表われとして片付けてしまいい得るような内容ではない。これに対し薛君度は『黄興与中国革命』において、両者の対立の根本には革命派内部に於ける孫文の奪権行動がある、とする。即ち、中華革命党の結党は革命運動中に於ける孫文の指導権の確立が第一の目

的であり、孫文自らが説明しているような党内へ混入した投機分子や官僚分子の淘汰を主眼としているのではない、と解釈する。⁽⁹⁾しかし、この孫||黄対立が示しているものは、すでに述べて来たように、指導権争いだけにとどまるのではない。

革命運動の再興・再構築をめざしての、従前の革命運動に対する総括の方法・内容をめぐる意見対立に起因するものである。従って両者の対立はブルジョワ革命派の革命運動の根幹にかかわる、極めて重大な意味をもつものと言わねばならない。私は、孫文による中華革命党結党こそ、中国ブルジョワ革命派が“変容”の第一歩を踏み出したもの、と考える。従って、中華革命党結党時における孫文と黄興との対立・決裂は正にブルジョワ革命派の“変容”開始を象徴する出来事であらう。

本稿では、両者の対立を主として革命運動のための組織の側面から考察する。孫文は何故新組織を作らねばならず、黄興は何故新組織に反対したのか、を見ることによって、“変容”の一端を考察してみたい。

孫文は何故中華革命党を組織せねばならなかったのか。孫文は何故同盟会を批判せねばならなかったのか。孫文の動機は比較的明白である。ここでは、まず中華革命党結党に至るまでの、同盟会内に於て孫文のおかれた位置の変化から彼と同盟会との関わりを整理しておきたい。

同盟会発足当初、孫文は同盟会を指導する立場にあった。彼の掲げてきた綱領は殆どそのまま同盟会の綱領の中に取り入れられた。しかし、辛亥革命の結果成立した中華民国は孫文の綱領、否同盟会の綱領において目指されたものとは頗る異なったものであったし、孫文自身も武昌蜂起以来の一連の軍事的政治的変動には直接タッチしておらず、同盟会内での彼の影響力、指導力は相当に低下していた。

何故孫文はこのような立場においこまれてしまったのだろうか。それには同盟会という組織の歴史と構造とをふりかえってみる必要がある。同盟会はその成立当初から一枚岩の団結を有ち、革命指導中枢としての機能を果たすに足る組織を備えているとはいえなかった。もともと強い地域性と独自

の志向とを有した革命諸団体の合同によって成立した組織であり、それがため「三民主義」を中心とする孫文の革命プログラムを会の統一綱領として戴き、孫文を会の指導者として戴いてはいたものの、彼の指導性は余り貫徹され得なかった。一九〇六年から七年にかけて主として広東地方で行なわれた軍事蜂起の相継ぐ失敗は、広東出身で広東に重点をおく孫文の指導に対する、両湖・江浙出身者からなる旧華興会、旧光復会系の会員を中心とした反発をひきおこし、これに加えて日本政府当局による機関誌『民報』への弾圧、幹部に対する国外退去命令と退去の際の孫文の行動とが、揺らぎ始めた同盟会に追いうちをかけた。さらには湖北出身者を中心とするグループが脱退し、「共進会」を結成するに至って、同盟会の分裂は組織面にまで波及、その革命指導中枢としての機能をさらに低下させることになった。また、孫文もこれ以降革命運動の理論的実践的指導者として革命運動に占める位置が徐に低下し始めた。一九〇九年、孫文が一応は同盟会の指導者という立場にありながら「中華革命党」という名の新党設立を計画したことは、そうした革命運動中における自らの指導力と位置の低下に対する彼の危機感のあらわれであり、そのような現状をもたらした同盟会という組織に対する彼の不

満と失望のなせるわざであつたらう。

孫文に代わつて同盟会内で頭角をあらわし、同盟会内の主導権を握ってくるのは、宋教仁、譚人鳳ら旧華興会系のグループである。先述の共進会の分離以後、彼らは次第に、孫文色の濃い同盟会の綱領とは異なつた革命プログラムを掲げ始める。そして、ついには同盟会中部総会、所謂中部同盟会を組織し、事実上の分派活動を開始した。中部同盟会は孫文派とは異なり、長江流域を革命の拠点として選んだ。武昌における軍事蜂起は、まさに中部同盟会の戦略に拠つたものであつた。⁽¹⁶⁾ この武昌蜂起は様々な手違いと致命的失策があつたにもかかわらず、清朝の命運を断つ一連の政治的軍事的変動の引き金となつた。これによつて宋ら中部同盟会の革命派内の覇権は決定的となり、孫文の影響力は著しく低下していった。⁽¹⁷⁾

孫文が亡命先のアメリカから帰国するのは、武昌蜂起から二カ月余も経つてからであるが、彼が武昌蜂起後直ちに帰国せず、アメリカや欧州諸国を訪問し各国との外交接衝に力を尽くしていたのは、彼が直ちに帰国して革命運動の指揮をとる必要がなかつたことも一因である。既に彼は革命運動中における自分の指導性が著しく低下し、彼が国内で政治的な活

動をする余地が残されていない点を承知していた、と考えられる。⁽¹⁸⁾ しかし宋教仁は「革命派」(同盟会を本来の革命派とするの)に対し、ここでは立憲派をも含めた、清朝に対し独立・光復を宣言した各派の総称として用いる)を掌握しきれず、臨時政府をも組織できなかった。孫文はそのような時期に帰国したが、帰国に際し広東へ立ち寄つた時の胡漢民(孫の腹心)とのやりとりは、彼の立場の微妙さを浮き彫りにしている。

孫文を臨時大總統にかつぎ臨時政府を組織しようとする動きを察知していた胡は、孫に対して、臨時大總統職は何らの兵力を有たぬもので、袁世凱の巨大な軍事力に太刀打できるだけの実力を伴なつた地位ではない、飾りに等しい存在である、と主張し、広東に留まり北伐を行なうことを勧めた。が、孫文は、今は清朝を倒す方が先決であり、今この機を逃しては全てが無になるとして広東を発ち上海へ向かつた。⁽¹⁹⁾ このことは、同盟会内外における孫文の地位・影響力の低下にかかわらず、そのような孫文に出馬を請わざるを得ないほど「革命派」内が混乱していること、そして同盟会が革命指導中枢として機能せずこれらの混乱を收拾できないほど指揮系統も乱れ弱体化していること、袁世凱の巨大な軍事力の前に正面切つて刃向うことができないほど「革命派」の実力が弱く追いつ

つめられていたことを示している。実際、孫文を軸とする南京臨時政府の成立によって、「革命派」はどうにか体勢を立て直し得たのである。¹⁹⁾

　　状勢がかくも悪化したのは、何といっても武昌蜂起以来革命派が革命の指揮権を十分に掌握しきれず、同盟会という組織も事態の進展に対応していくだけの力を有っていなかったことが大きく影響している。革命の発祥地武昌ですら立憲派黎元洪が革命軍の指揮官におさまっているなど、独立・光復を宣言した各省の多くは程度の差こそあれ立憲派が実権を握っており、²⁰⁾清朝側との交渉や臨時政府の組織などは、これらの各省の代表によって構成された各省軍政府代表者会議の場で方針が決定された。同盟会単独では最早何もできなくなっていたのである。²¹⁾宋教仁は自らの革命プログラムに従って兵乱の長期化を避けて清朝との和平交渉を推進しようとする²²⁾が、このような状況下にあったがため、「革命派」内の足並みの乱れは余りに甚しく、意志統一すら極めて困難な有様だった。²³⁾「革命派」にとっては孫文をかつぎだすことが、最後の望みの綱であったといえよう(但し宋教仁や譚人鳳は孫文を推戴することには最後まで反対した²⁴⁾)。

孫文の臨時大總統推戴はこのような事情のもとに行なわれ

たものであったため、孫は自ら覚悟した通り実権の乏しい存在たることを免れ得なかった。事態は孫文のかねて期していたプログラムとは全く異なった方向へ動いていたのである。

武昌蜂起以後の一連の事態は孫文の意に沿わぬことばかりであった。革命の唯一の指導者たる、同盟会総理たる彼が今や飾りにも等しい臨時政府首班としてかつがれていた。革命の唯一の綱領であった「同盟会革命方略」が全く無視されて新政府の構成或は政策に殆ど反映されていなかった。²⁵⁾しかし何といっても重大な意味を有っていたのは、当時中国最大の軍事実力を誇り、政治的野心満々たる敵將袁世凱への政權移譲を「革命派」が決定していたことであろう(後述のように黄興は袁世凱のかつぎ出しに一役かっている)。孫文は勿論のこと、宋教仁も民国成立後の政治活動の大半を袁世凱封じ込めの為に費やすことになった。孫文は臨時大總統在職中の労力の多くを、大總統の権限を抑制し議会のそれを伸張させるという事実上袁世凱に焦点を合わせた「中華民國臨時約法」の制定に費している。宋教仁はこの「約法」の規定を利用し、議会に於いて主導権を掌握し責任内閣制度を確立させて大總統袁世凱を名譽職化してしまおうとした。かくして宋は、同盟会を議会政党に改組し、さらに国民党へ改組して議会内で

の多数派形成工作に奔走した。

宋教仁が展開した、他政党吸収による議院内多数派形成工作は、これが従来の同盟会の基本綱領、即ち孫文の考えが盛り込まれた、同盟会の同盟会たる所以の諸綱領の変更を伴うものであっただけに、孫文を支持するグループの強い反対をひきおこした。ところが孫文自身は民国成立後は党務に関しては格別際立った発言をしていないのである。

前述の、一九〇九年に計画された新党結成の件から見られるように、孫は既に同盟会という組織に事実上見切りをつけていた、と思われる。また、孫の同盟会内の地歩は著しく低下していた。従って孫文が民国成立後党務に関して発言らしい発言をしていないのは、発言する気もなかったし、発言する立場でもなかったであろう。彼は政務・党務に関しては全てこれを宋教仁に委ね、政界引退を表明した。宋教仁の革命プログラムによって革命が成就し共和国が成立した以上、孫文は政務・党務両面において引き下がったのである。私は、宋教仁路線全盛期にあって孫文は路線問題に関しては割りきった姿勢をとっていたと考える。孫文は宋の路線にのって国家建設がともかくも順調に滑り出したのを見て、自らの路線の固執が建設作業に混乱を招くと考え自らの路線を取り下げ

たわけである。しかし、このことは言い換えれば、孫は相手の失敗・破綻を認めれば直ちに自らの路線を掲げて立ち上がる覚悟を秘めているのである。一九一三年三月二〇日、宋教仁は袁世凱派の放った刺客によって狙撃され二日後に斃れた。孫文は宋の横死を以て宋教仁路線の破綻と見做し、自らの路線をあらためて掲げて立ちあがる。

孫文の再挙は、宋教仁路線及び宋教仁路線を生み出した“同盟会体制”そのものへの全面的批判の提出という形で示されていく。孫文の宋批判、“同盟会体制”批判は二つの点に集約されよう。⁽²⁸⁾

第一点。同盟会は会員を十分に統制し得ず、組織としてのまとまりを有てなかつた。それがため革命に際しても指導するという役割を果たし得なかつたばかりか、会員は革命後成功に酔い痴れて自分勝手な行動、打算、利権獲得に走り、組織の自滅をもたらした、と孫は批判する。そして望ましい革命政党を形成し革命運動の再建をはかるとすれば、革命党員の紀律、管理を厳正にし、党首の指令に一団となつて応えるような組織を形成する必要がある。それによつてはじめて革命運動を終始一貫指導し得る、革命指導中枢としての役割を果たすことができる、とする。

第二点。革命後、党指導部（宋教仁らを指す——筆者）が

黨員の量的拡大をはかる方針を採用したため、黨員の質が低下し、革命の主義及びその遂行の重要性を理解しないばかりか、単に利権とポストを求めただけの入党者が多くなり、党内規律は有って無きが如くになってしまつて、ただでさえ緩い党内が一層まとまりのない散漫なものになつたと孫は批判する。そして、望ましい革命政党を形成し革命運動の再建をはかるとすれば、入党条件を嚴格にし、少数精鋭体制にもとづく合理的かつ効果的な革命指導組織を造らねばならぬとする。

孫文が第二革命失敗後新たに打ち出した上記の如き組織方針は、同盟会のそれとは非常に異なるものであり、革命政党をより機能的より実践的に構成するとともに党首を頂点とした革命の前衛のみによって組織し革命指導中枢としての役割を十二分に果たそうとするものといえる。孫文はこの方針に従つて亡命先の東京で新党結成工作を開始した。そして黄興を始めとする同盟会以来の古くからの同志と衝突するのである。

三二

黄興は何故孫文の新方針に反対したのか。反対するとすれば、彼はどのような対処の方針を有っていたのか。黄興に就いては、薛君度による優れた評伝があるが、孫文や宋教仁に比べてこれまで言及されることが少なかつた。ここでは孫文と対立するまでの黄興の言動を少しく詳細におつてみたい。

黄興は両湖系の華興会の指導者で、同盟会に於いては総理孫文に次ぐ地位にあつた。そして動もすれば独走しがちな孫文と、そのような孫文に反感を有つ同盟会会員との間に立つて仲介役を果たしていた。とりわけ同じ華興会出身の宋教仁らが反孫文の急先鋒にたち、事実上の分派活動に入つた時も黄は孫文の側にとどまり、同盟会の完全な分裂を辛うじて防いでいた点は重要であろう。一九一一年春の黄花崗起義失敗後香港に身を潜めていた黄興は、湖北の党人から、武昌方面での機が熟して来たので是非指揮をとつてほしいと要請される。湖北での蜂起は宋教仁ら中部同盟会の戦略であるが、中部同盟会の指示を仰いでいる湖北の党人（同盟会を真つ先にとび出した『共進会』も加わっている）が、これまで孫文と行動を

ともにしてきた黄興に指揮を依頼してきたということは、それだけ宋教仁らも黄興には信頼をおいていたことを示している。しかし、右の要請の背後には同時に、同盟会ナンバー2であり、派を問わず広い信望を得ている黄興を担ぎ出すことよって同盟会全体の主導権を握ろうとする宋教仁らの計算もあったと考えられる。宋自身の同盟会内での序列は必ずしも高いとは言えなかったらしく、彼は以後常に黄興を前面におし出しながら、革命の、同盟会内の主導権を握ってゆこうとする。それほど同盟会の人々に与える黄の影響力は大きかったのである。しかしながら宋の計算は見事に外れた。黄興がまだ香港を発たないうちに武昌蜂起がおこり、指揮者のいない蜂起軍は逃げそこなった立憲派軍人黎元洪を担ぎ出してしまふ。宋や黄が武昌に駆けつけた時には既に黎元洪による立憲派支配が確立されていた。しかも宋が、あてにしていた黄興は、自ら指揮をとった漢陽の攻防戦に敗れ上海へ逃げ帰ってしまう。敗軍の将として世論の黄に対する風当たりが強くなり、宋も声を大にして黄をおしたてられるような寡困気ではなくな³⁴ってしまった。そして肝心の黄興は自ら立って同盟会をひっぱってゆこうという姿勢を見せない。上海の一人が「孫先生が今海外にある以上、黄先生が唯一の最高指導者

なのだから、南京で全国的な軍政統一機構を作って北伐を続け、革命事業を完成させるべきだ」と進言した時、黄興は、組織の早急な必要性を認めつつも自らが中心となることは拒絶し積極さを見せない。³⁵このような黄の姿勢が宋教仁の計算を狂わせたのみならず、臨時政府づくりを始めとして辛亥革命全体の行方に大きな影響を及ぼす。統一された指揮機関、即ち指導中枢が存在しないということは、革命軍の士気にかわる問題であり、この点は前線にいる者が一番よく知っていた。十二月四日、各省代表会議は黄興を臨時大元帥に推薦し、統一された指揮機関の早急な設立を訴えた。³⁶この時も黄興は、黎元洪もしくは孫文が適任であるとして就任を固辞したが、「今から清朝と交渉せねばならぬのに臨時政府が作られていないとは何事か」との批判をうけ、仕方なく暫定的に任に就くことになった。

臨時政府組織問題が急を要していたことは勿論黄とて知らぬわけではない。組織のために広東の胡漢民や北京の汪兆銘ら同盟会の有力者に事態の急を訴え、尽力を求めている。³⁷注目すべきことは、黄興がここで袁世凱に局面打開への期待をかけていることである。同じ汪兆銘宛電文で黄は、袁世凱が心を決めしだい自分は臨時大元帥を辞し彼に後を任せるつも

りだ、と語り、袁への期待を明らかにしている。何故袁世凱が必要なのか。黄は言う。「項城（＝袁世凱）は全国に人望あり、大局をおさえる器を有している。彼が民軍と一致した行動をとってくれるならば、大局は一気に決し、外国も速やかに承認するであろう」云々。袁世凱のかつぎ出しを推進する黄興であるが、恐らく彼は「革命派」に統一された指導機関をつくり局面をおさえるだけの力量がないことを認識していたのではないか。認識していたからこそ、外国の姿勢に耳目を集中させ何とかして大局の安定をはかろうとする。袁世凱の巧妙な世論操作にのってしまったといえばそれまでであるが、立憲派による絶え間ない横槍と、情勢の進展についてゆくに足る組織力、機動力を失なっていた同盟会の狼狽との間で、黄興は混乱を收拾し大局を安定させうる実力を有った人物として袁世凱を見出すのである。

しかし、もし大局の安定を望むのであれば何故黄興は自ら立って同盟会をまとめ体勢をたて直そうとしなかったのだろうか。黄興はこの点に関して次のように語ったと伝えられる。「同盟会の総理たる孫君をさしおいて自分が先に就職したとあらば、彼にとっても不快だろうし、同志の間にも疑念を招く。……革命の同志の最も必要なことは団結一致してい

ることだ。個人の権利がどうこういって譲り合うことは必要でない」と。ここには、ナンバ―に徹しようとしている黄興の姿、「革命事業に忠実で私心がない」黄興の姿を見ることができ、が、むしろ、孫文派と宋教仁派との間で同盟会内のとりまとめに苦しんでいる彼の苦悩をみてとるべきであろう。宋教仁が黄興を前面におしたてて実権を掌握しようとしていたらしいことは前述の如くだが、黄はこの宋の意図を察知し、孫文派の反発をまねかぬように慎重な姿勢をとりつけていたとも考えられる。黄興は遂に孫文の帰国まで慎重でありつづけ、これがため、宋教仁は黄興をおしたててという思惑が外れ、宋が最も嫌ったところの、孫文を首班とする南京臨時政府の成立に至ることになる。

この時期に見られる黄興の言動は不可解なようである。しかし私は彼の言動の根幹には二つの基本的発想があると思う。即ち、

(一) 大局は安定させねばならない。しかし同盟会にその力はない。

(二) 同盟会の、「革命派」の分裂は絶対に避けねばならない。

黄興は同盟会単独の力で大局を安定させねばならないと考え乍らも、如何とも為し難い同盟会の分解状況の中で身動きが

とれず、ついに袁世凱の担ぎ出しに局面打開の道を見出していったと思われる。袁世凱の担ぎ出しは結果として革命の転覆につながってゆくのであるが、黄も内心ではそれを恐れ乍らも、敢えて袁の有つ力に頼らざるを得なかったのである。革命指導中枢としての機能を殆ど喪失、もはや革命党としての体をなしていなかった同盟会は、外面の華々しさととは別に、そこまで追いつめられていたわけであり、黄興はそのような段階の同盟会の指導者だったのである。

武昌蜂起後の同盟会内外の混乱の中で、黄興が上記の如き綱渡りを演じざるを得なかったことは、民国発足後の彼の政治行動を理解するための視座を与えてくれる。民国発足後、彼の政治面での言動は、ひたすら南北（即ち長江流域以南を地盤とする革命派と、華北を地盤とする北洋軍閥と）対立の緩和・解消と革命派内の統一・団結の保持とに費やされるのである。

南北対立は、武昌蜂起に続く一連の運動が十分な拮抗がりをもつに至らず、「革命派」と鎮圧する北洋軍閥とが相拮抗する状態になった時から始まったといえるが、双方停戦には応じたものの相互不信は根強く、民国成立後も南北の緊張はおよさまるどころか寧ろ激化の傾向にあった。そしてそれ故に南北和平会議も膠着状態に陥っていた。これに対し黄興は積極

的な働きかけを展開してゆく。彼は和議の目的をはっきり「大局の安定にある」と言い、そのために革命軍側の無用な挑発を厳しく戒める一方、清朝軍（北洋軍閥軍）にも自重を呼びかけ、不必要な摩擦をこれ以上くりかえさぬよう訴える⁽⁴³⁾。何故「大局の安定」が果たされねばならぬのか。何故国内が統一されねばならぬのか。黄が連名で全国の軍人に発した檄の中に「団体を結集し、国基を鞏固にし、五族をして各各共和を享受せしむれば、列強も敢えて干渉せざらん」という語が見える⁽⁴⁴⁾。南北両派の軍人（陸軍）に連合会を組織し互いの親睦を深めよ、という呼びかけなのであるが、ここには、列強の干渉を防ぐには、南北が無用な対立、衝突を繰り返してはならない、一致協力して国家の基礎を固め安定させねばならない、という意を読みとれる。これは連名のものゆえに必らずしも黄興個人の見解とは言いきれないが、黄興がこの語の通りに行動していることは事実であるし、陸軍軍属に対し、対立を緩和し団結するように訴えた文の中に使われているということは当時列強の武力干渉への恐れがかなりの現実味を帯びて広範に存在していたことを示す。黄興は紛れもなく、この外圧に対するために、外圧によって生じる国家の危機を訴え、「大局の安定」即ち国内の一致団結を求める

のである。

また黄興は臨時政府の北京移転（四月）と同時に「南京留守」という役職に任ぜられ、南方各省の軍隊の管理を担うことになるが、袁世凱の兵糧攻めもあって、彼は専ら管轄下の軍隊の縮少を推進する。このことが革命軍の力量を大きく削ぐことになり、南北の軍事力の不均衡をさらに拡大してしまつたことは確かだが、黄興にとっては自ら軍隊の縮少を敢行することによって袁世凱にも軍隊の縮少をさせて緊張緩和を促すことを期していた、と思われる。

さらに六月になると黄興は「南京留守」という役職自体をも辞めている。南京留守府は言わば南京臨時政府の名残りである。南側にとっては活動の拠点となるべきものであり、事実留守府が特に設けられたことにより臨時政府の北京移転の痛手を些かなりと補い得ていたのである。しかし黄興は「南京留守」という地位が諸外国人には二重政権にみられがちで借款交渉の妨げになつてゐること、また北方の世論が南京留守府を反政府勢力の拠点となる恐れありと怪しんでゐることを理由に、南北の相互不信が内訌に発展し外患の発生につながらぬよう自らの辞職と南京留守府の廃止を申し出るのである。⁽⁴⁹⁾六月十四日、南京留守府は廃止され、革命派は拠点をまた一

つ失ふこととなつた。しかし、黄興は「大局の安定、南北調和」を優先するのである。

黄興の「大局の安定、南北調和」への努力は、さらに単一大政党体制の構築へと向けられていった。彼の単一大政党組織のための働きかけは、宋教仁による国民党の結成（八月）を機に明確に打ち出された。黄興は翌九月袁世凱ら北京臨時政府首脳と会談するため孫文とともに北京を訪れたが、その折各政党本部で行なつた講演で自らの構想を明らかにしている。九月十五日、国民党本部に於いて彼は次の如く語る。「中華民國は今日なお完全に成立しておらず、とりわけ極めて大きな政党によつて民国を維持してゆく必要がある。国民党がこの時にあつたて大いに党の拡張をはたし、極めて大きな政党を成立させることができれば国家をして日々鞏固たらしめるであろう」と、黄は日本の政友会を例にとりながら大政党的存在が国家の安定及び飛躍的發展に不可欠であることを訴えた。⁽⁵⁰⁾

翌々日即ち十七日、今度は袁世凱の与党たる共和党本部に於いては「私たちは相互に国家を前提として（万事を）考えておりますから何処に話しあいのできないようなことがありましよう。……蓋し私たちは互いに国家を前提としておりま

すから、真理を求めようとすれば、そこには先入観の入り込む余地などある筈はありません」と、黄は「国家」に力点を置いて、対立の解消と融和の必要性を説いている。⁽³¹⁾ 黄興が袁世凱をも包含する規模で考えていることは明らかである。

黄興の構想が最も明瞭に示されるのは、同月二十二日、民主党本部における講演である。「今後の国家の前途に対し自分は大きな悲観を抱いてもいるし、大きな希望をも抱えています。悲観と申しますのは、もし中国という国家を建設する材料が非常に豊富であるならば、これは大変喜ばしいことでありますが、然し乍ら僅か半年にもならぬうちに内閣が二度も交代するとは何とということか。政府の施策はくるくる変わり、各党の意見はまちまちであります。一体何年待ったら、政府、政党、国民を、一つの炉の中に融合させ立派な政治を行なうことができるようになるのでしょうか。希望と申しますのは、今国家は大変な危機の最中にありますが、全国の人材を、一つの党の中にまとめ一致協力した行動をとるべきで、そうしてこそ国事に救いがある、ということです。同盟会はこのたび国民党と改められましたが、貴党が一つの炉に融合されることを深く望む次第です」⁽³²⁾ (傍点筆者)と、黄興は民主党に対し、国民党への合流を暗に呼びかけるのである。

黄興は、このように、外圧が厳しい上に国家としての形が十分に備わっていない現在、国内の無用な対立は国家の滅亡を招く。それを避けるには南北の調和は勿論のこと、政府・政党・国民を一つに合同合一させた組織を形成することによってはじめて好ましい政治がもたらされる、として、全国の人材を一つの党におさめ、単一の大政党を組織することが現在の中国にとって最も望ましい、と訴える。それがために各党——勿論最大の實力者にして最大の危険人物たる袁世凱の手兵共和党をも含む——の合同、及びこの問題に関しての協議を呼びかけるのである。

黄興の所謂内閣、政党、構想もこの延長上に把えることができる。内閣政党とは、内閣の構成員は全て国民党へ入党し、国民党員として行政の遂行にあたるべきだ、として北京臨時政府の袁世凱子飼いの閣僚たちに国民党への入党を呼びかけたことに対して、当時のジャーナリズムが宋教仁の政党内閣構想にひっかけて皮肉った言葉である。黄興は先述の袁世凱との会談の際、袁より後継内閣首班の人選について打診をうけた時「誰でもかまわぬが国民党への入党が条件だ」と答えた。⁽³⁴⁾ かくして再び袁世凱直系の内閣(趙秉鈞首班)が成立した。黄興は、この内閣政党の意義を次のように説明する。「現

在臨時政府の期限（＝正式政府の組織）が迫っており、しかも内政外交ともに困難な問題が山積している。だから強力な政府を組織しなければならないのだが、これには必ず強力的な政党を必要とする。それでこそ政府の威信を明らかにし、国の基を鞏固にし、さらに外患を解消し得るに足る」と前置したうえで「わが党の唯一の宗旨は政府を扶助することにある。しかし政府と政党とが連鎖関係にならないならば扶助といってもその責を十分には尽くせない。そこで袁世凱總統ともじっくり話しあった結果、全ての閣僚に国民党に加わってもらうことになった。……今度の件は実に民国の前途を確保するための行動だ」と語り、所謂内閣政党問題が、当時の中国のおかれた政治状況の中で妥当な、且つ速効的な解決策であることを力説しているのである。

前述のように、黄興は「大局の安定、南北調和」を最大の政治課題とし、それを果たすために単一大政党体制の構築を図った。その場合同盟会から発展した国民党の、政界における主導権をどのように確保してゆくのか。先述の国民党本部及び民主党本部に於ける講演内容から、黄興が単一大政党の母体として国民党を措定していることは明らかであるが、内閣政党構想はこの措定の具体化であると思われる。即ち、黄

興はこれによって国民党と政府とを一体化させ、そのうえで国家の危機を背景として国民意識の覚醒につとめ、政府即ち国民党への協力をとりつけて徐々に政府・国民党へ同化させ、国民党のもとに政府及び全ての諸党派を合流・統合させることを考えていたのではなからうか。

黄興は、辛亥革命後、右傾化・穩健化したと言われ、宋教仁派へ接近したと見做されがちである。しかし、黄興と宋教仁との間には路線に大きな差異があったと見做すべきである。宋教仁の政治的行動は、前章に記した如く、袁世凱から如何にして政治の実権を奪還するかという点に絞って計算されたものであり、責任内閣制の確立により袁の無力化を図っていた。その意味で、宋は徹頭徹尾袁と対立する姿勢を見せている。しかし黄興はそうではない。確かに黄興は、宋教仁が孫文派の反対を押しきって行なった同盟会の改組、国民党の結成に対しては之を肯定し推進している。が、国民党の結成は宋にとっては、これによって議会で安定多数を確保し責任内閣制の実現をはかるためのものだった。黄興にとっては、これは同盟会から武力闘争の性格を削除し緊張緩和を促すための一環であり、さらに袁世凱与党たる共和党の包含をさえ視野に入れた、単一大政党制構築の出発点であった。黄興は、

対立、対決、排除よりも調和、団結、融合を重んじた。彼にとつては、国家と民族の危機を脱するには、これが唯一最善の道だったのである。これは孫文の打ち出した新方針と相容れるものではなかった。

四

辛亥革命に至るまでほぼ同じ道を行ってきた孫文と黄興は、民国成立後それぞれ異なる道を進り始めた。両者の間に生じた此等の差異は民国元年の間は余り表面化することはなかったが、宋教仁暗殺事件への対応をめぐって遂に顕在化することになった。⁽⁵⁸⁾

第一回総選挙における国民党の圧勝から間もない一九一三年三月、責任内閣制の樹立を訴えて全国遊説中だった宋教仁は上海駅頭にて狙撃され斃れた。自らの地位に不安を感じた袁世凱が刺客を放ったのである。偶々日本訪問中であった孫文は急遽日程を打ちきって帰国、直ちに党幹部と善後策を協議した。この席上孫文は武力による袁世凱打倒の方針を示唆した。これに対し黄興は法による事件の処理を主張し、孫と激論となった。結局孫文は折れざるを得ず、当面の

袁との衝突を避けることになった。⁽⁵⁹⁾ 宋の死は端無くも孫文と黄興の間に考え方にかんがりの差異が生じていることを露呈させた。孫が折れざるを得なかったのは実際に軍事行動に訴えるだけの力を国民党が有っていなかったことに加えて、彼の意見が党内で殆ど支持を得られる見込がなかったためである。

宋事件以後、袁世凱の独断擅行はとどまるところを知らなかった。黄興も流石に袁の危険性を認めざるを得なかった。それでも黄興はしめ国民党内の大多数は国家の分断を恐れたか、対応が遅れた。⁽⁶⁰⁾ 同年六月、袁世凱は突如譚人鳳、李烈鈞、胡漢民の国民党系三都督の更迭を発表、これが引き金となって所謂第二革命の火の手があがった。結果は世に謂う「違法大借款」によって自らの軍事力を増強して満を持していた袁世凱の軍の前に、革命軍は齒が立たず、黄興の軍事指揮の不味さも手伝って一カ月余りで鎮圧されてしまう。孫文、黄興ら旧同盟会系の国民党要人は殆どが亡命を余儀なくされた。宋教仁事件への対応をめぐって既にズレの目立っていた孫文と黄興は第二革命の過程において一段とミゾを深めることになった。⁽⁶¹⁾ そして第二革命失敗後の革命運動のあり方、革命運動再建の方法をめぐって両者は遂に激突するのである。

孫文は日本へ亡命するや直ちに新党結成に向けて動き出した。⁽⁶²⁾ 新党は先述の如く孫文の「同盟会体制」批判に基づいた新しい性格のものであり、彼にとつては、第二革命によって瓦解した国民党の、或はその前身たる同盟会の単なる復活再生であるう筈はない。新党は革命指導中枢としての機能を十分に果し得るような、効率的合理的且つ堅牢な組織でなければならなかった。この堅牢さを保証するため、孫文は入党希望者全てに次のような宣誓書をしたため、署名ののち捺印をおすことを要求した。

—— 中国の危亡を救い、生民の困苦を拯わんがため、一己の身命、自由の権利を犠牲にして、孫先生に附従して、革命を再挙せんと願ひ、民権民主主義並びに五権憲法を創制するを達し、政治をして修明、民主をして樂利、国基をして鞏固に措かしめ世界の和平を維つを務めとす。(傍点筆者、原漢文)⁽⁶³⁾

要するに革命の再興のために有無を言わず孫文の命に従うことを誓わされるわけである。⁽⁶⁴⁾ 孫文はこの誓約書をはじめとする一連の手續をふむことを新党への入党条件となし、どんなに古くからの同盟会会員であったとしても例外ではない、と強硬な態度を示した。⁽⁶⁵⁾

このような孫文の姿勢及び新党設立案に対して黄興はじめ亡命し来った革命家の多くは一斉に反発した。黄興は「もし誓約書内に『孫先生に附従して』云々と明記するならば、それはとりもなおさず一個人に従つて一個人を助けて革命を行なうことになる。これは不平等以外の何物でもない。また誓約書に捺印をおすとすれば、それは犯罪人の自白書でもあるかの如き屈辱感を覚えさせる」と、孫文の提出した条件を強く批判し、さらに「もし徒らに個々人に対する組織的統制を基本原則とする〔若徒以人為治〕なら、それは袁世凱のやつてきたことの真似であり、功績がたてられないうちに人に追いつかれるのを怯えているのだ。権利を口にして呼びかけられる筈もない」と、孫の行為自体に激しく抵抗している。また後に中国国民党の元老的存在として君臨することになる張繼は、孫文が彼の腕を掴んで無理矢理に捺印をおさせようとしたのを拒み、「孫先生の革命に服従し捺印をおすことは何れも同志の心情に反するもの。たゞ強要されたところで何ら益とするものはない」と言い放つた。⁽⁶⁶⁾ 孫文直系の胡漢民ですら、孫文の行動には余りいい顔をしていないのである。⁽⁶⁷⁾ 黄興とともに先頭に立つて、同志を励まし同志をまとめてゆかねばならぬ立場にあった孫文が、あろうことか同志の間にいら

ぬ楔を打ちこみ、招かれざる混乱と癒すべからざる亀裂をひきおこすかのような行爲に出たのである。革命派の人々の戸惑いと動揺は大きかったに違いない。当時の模様は孫、黃兩者の調停に奔走した宮崎滔天の消息に生き生きと記されている。

——亡命客中の首領孫、黃二氏の意見感情の疎通を缺くこと何よりの恨事也。孫氏は急進説を採り黃氏は隱忍論を主張す。単に意見の上のみならず感情の上に於て融和し易からざるの衝突ある様に思はる。孫氏は曰く「支那人は総て駄目也、我は支那の救世主也、総て我命に従ふものは來れ」と。最初より最後まで奮戦して最後に亡命せし李烈均氏に対してさへも此の態度を以て迎へて聊か反感を買へり。其後大に苦諫するところありて神より降りて人間らしくなりたるも、動もすれば其軌道を逸せんとす。黃氏は曰く「孫さん氣違ひです」と。其神より降りて人界に入りしを説くや「それは大変好いです」と喜ぶ。両氏固より敵意あるに非ざるを見る可し。然も上海より新來の急進家來るや一旦人界に降りし神様は再び九天の上に登らんとす。其心情の高潔、其抱負の大、実に感ずべく服すべしと雖も、世態人情を去る余りに遠く、人をして実行の如何を疑はし

む。張繼氏即ち歎じて曰く「孫さんの人格理想は誠に豪ひですが、実行問題は無覺束です。僕は其命に盲従するの勇氣は無いです」又曰く「黃さんは実行的です。ヤルと思ひさへすれば実に豪ひです。大々的にやるです。併しヤル。氣があるか無いか僕は判りません」孫氏は來る人毎に火の如きの熱情を以て革命を説き、黃氏は黙して多く語らず。二人者の交情今日迄は旧に復せず、誠に遺憾千万に候。……孫文の突然の豹変に困惑しきっている革命派の人々の様子が彷彿として來る。この宮崎滔天は孫、黃兩者の対立の根本を「急進」と「隱忍」との路線の対立と把えている。無論これは相對的にみた評語であるうが、問題が単に入党条件をめぐる技術的な面にとどまらない、兩者の革命路線の差異にまで相渉る点を衝いているのは流石である。

これまで見てきたように、孫文と黃興の辛亥革命以後の歩みは全く異っている。兩者の間には、辛亥革命に対して、辛亥革命の結果生まれおちた中華民国に対しての関わり方に差異が生じており、それが運動の進め方、運動推進の母体となる組織のあり方に対する考え方の相異を発生させた。この相異が、兩者の間にかねて存在した軋轢——袁世凱に対する認識の仕方、宋教仁事件に対する応対の仕方、第二革命の指揮

・戦略をめぐる確執等——に重なって、遂に中華革命党の入党手續をめぐって爆発したのである。両者の主張は以下の如く整理される。⁽¹⁾

(一) 党員について

孫〓党員は少数精鋭主義を採るべきであり、従って不適格者はどしどし排除して然るべきである。

黄〓党員は排除よりも包含が必要である。度量を広くもち党派の異なる者でも受容し同化させてゆくべきである。

(二) 党の体制について

孫〓党員は党首の命に従って行動しなければならず、自分勝手な行動を禁止する。党首たる自分に対し服従の誓約を要求するのは当然である。

黄〓党は革命を志す者の共同組織であり、一個人の命に従って一個人を扶けて運動をおこなうのは、不公平不平等以外の何物でもなく、非民主的である。

(三) 当面の行動について

孫〓従来の党員一人一人をあらためて再吟味し入党条件を受諾した者のみ入党を許可する。これによって統一された団結力の強い、強力な新党を設立する。

黄〓党員は沈滞している今こそ大同団結し、袁世凱に反対

する全ての勢力を結集して一致して共和国及び革命運動の再建にとりくまねばならない。

これらの諸点をふりかえってみると、黄興が従前の、同盟会以来の組織原則を敷衍していると思われるのに対し、孫文は同盟会のそれとは明らかに異なった組織原則をうち出していることが見てとれる。孫文は第二革命の敗北により辛亥革命の成果を殆ど喪失してしまうという結果に終わった、同盟会的組織の欠陥を克服し脱皮をはかるべく、同盟会的限界をのりこえるためのアンチテーゼを提出している、と私は考えたい。孫文は同盟会とは異なる運動組織を作り、それを母体に運動を展開してゆくことを宣言しているわけである。組織面における大きな「変容」である。

一方、黄興の見解は、いづれも民国元年における彼の発言が敷衍されたものであり、袁世凱による軍事支配の確立、即ち辛亥革命の事実上の失敗という事態を経て彼の考え方に変化が生じていないことがわかる。このことは、黄興が革命運動の再建に関して従来の方向を堅持し更に深化させることによって再建をはかるといふ方針を抱いていたことを示している。黄興が孫との論争の中で明らかにした、彼のめざしている運動組織とは、主義を等しくする個々人の相平等な集合

体としての同志の会、と言えよう。これは同盟会の組織原理に等しい。⁽⁷²⁾ 黄は孫文に対し次の如くに自らの信念を表明する。

——自分は……今度の敗戦は正義が金銭の力によって一時的に潰されたのであって、真の敗北ではないと考えております。内外の歴史をひもとき進化の法則に照らしてみたい時、正義の伸びなかつた例⁽⁷³⁾はないのです。ですから最後の勝利は吾が党の手にあるわけです。今、吾が党にこの勝算がある以上、若し根本からやっ払いこうとするのなら、吾が党がかねてより掲げてきた主義に基づき、これを発展拡大させてゆくべきで、小さな暴動をおこして急功を焦ったり、常軌を逸した行動で世間をおどろかしては駄目です。心をひらき肚を割り、昔の是とする所は是とし非とする所は非として一切を国民の前に披歴してしまえば、吾が党の信用も徐々に回復してゆくでしょう。また度量を広くもち、受容すべきは受容し「受環納流」、党派を異にしても愛国心をもつ者をして吾が党に帰依させる必要があります。そして然る後、吾が党の堅忍不拔の士、学識優秀の士、百変を歴して背くことなき者と合わせて幹部を組織してゆけば、計画は久遠、それぞれにコトをすすめても決して不統一と

いうことにはならぬ筈です。⁽⁷⁴⁾ ……

黄興は、第二革命の敗北という現実に直面して、同盟会の原点への回帰によって事態を乗り切ろうとしていた、と言えよう。

これに対し孫文は、既に見てきたように、そのような「同盟会体制」を否定し、全く異なった組織原則を打ち出し、脱却・克服をめざしている。それは、指揮系統の一元化、党首を頂点におく革命指導体制の合理化であり、党の革命指導中枢としての機能を従来より遥かに高め、革命後の建設作業に於いても党と黨員の指導性を強調するなど、党主導型の革命運動の構想を明確にしていることに示されている。⁽⁷⁵⁾ 孫文にとって、新党中華革命党は、辛亥革命の成果を殆ど喪失するという冷徹な事実に帰結した「同盟会体制」を克服・止揚するものとして構想されているわけである。既に述べたように、同盟会は「驅除韃虜、恢復中華、創立民國」のスローガンのもとに三つの団体が大同団結した組織であり、言わば一種の統一戦線的連合体として誕生した。そのため当初から革命指導中枢としての機能に乏しく、また長たる孫文の指導性も十分発揮し得なかった。この「同盟会体制」が結局自らもたらした成果を喪失するという結果に終わったため、孫文はその

ような結果を導いた「同盟会体制」を止揚する革命指導体制の樹立を敢行した、と見做し得るのである。従って孫文はこれまでとは違った革命運動の提起を行なうのであり、従来のそれに固執する黄興とは必然的に訣別する運命にあった。だからこそ孫文も黄興の説得は試みるもの敢えて和解には積極的に乗り出さなかったのである。^(註)

新党中華革命党の成立大会を真近に控えた一九一四年六月三十日、黄興は自分のために用意された新党協理（ナンバー2）のポストを無視してアメリカへ渡った。この時をもって同盟会は名実共にその幕を閉じたのである。

結 語

第二革命後、中華革命党結党の際に爆発した孫文と黄興の対立・衝突は一見中華革命党の入党手続をめぐる問題であるが、その背景には、辛亥革命以降徐々に生じてきた両者の政治方針、組織運営に対する考え方の分化が存在する。本稿で扱った革命指導政党の組織方法は、革命運動再構築のために従来のそれを継承していくのか否か、というブルジョワ革命派にとっては大きな分岐点であった。孫文は、同盟会時代

の体験、辛亥革命以後の政局に携わった際の体験をもとにして、より集中的、そして何よりも実践的な、革命指導中枢としての党を形成しようとした。そして黄興とは、彼が従来からの、同盟会や国民党において見られた所の幅広い層を結集・吸収する母体としての党組織という考え方を堅持し発展させようとしたがために決裂するに至った。

この孫・黄決裂は、中国ブルジョワ革命派の「変容」が開始されたことを象徴している。ブルジョワ革命派が従来とってきた組織及び指導体制に代えて、新しい体制の構築のための模索が始められたからである。ここで孫文は、辛亥革命の事実上の失敗という結果をもたらした「同盟会体制」を超えるための新しい革命組織のモデルを提出することになった。

孫文が打ち出したこの新しい組織モデルは、寺広映雄氏が既に指摘されているように、彼自身の政治思想及び革命思想の深化・発展と密切に関わっている。本稿では、組織的側面での変化の意義に重点をおいたために、この新組織の具体的内容及び孫文の思想の深化・発展との関係にはふれられなかった。この点については、稿を改めて論ずる予定である。

最後に、冒頭に於て述べたブルジョワ革命派の「変容」ということに対して、私自身の見通しを述べておきたい。

(一)「中華革命党総章」及び「中華革命党革命方略」によれば、革命中及び革命後の国家建設に対して革命党は指導的役割を果たすものとされ、党の構成も直ちに臨時政府に転化できるように考えられている。そして民国大總統は党総理が兼務するものとされる。これは、後の「以党治国」の萌芽として考えられる。

(二)「中華革命党革命方略」によれば、中華革命軍は完全に党の指導下におかれ、党と不可分の組織となっていて、さらに革命軍大元帥は中華革命党総理の兼務とされている。これは、後の「党軍制」の萌芽として考えられる。

(三)従って、孫文は国共合作体制構築にあたって全く無条件に白紙の状態で、「以党治国」という考え方や「党軍制」などをソ連より模倣・導入したのではなく、中華革命党結党時に於いてそれらと類似した構想をある程度抱いており、孫文は自分自身の構想の補強・具体化のためにも導入に積極的に踏みきった、と考えられる。

(四)国共合作体制は孫文にとつては中華革命党当初の構想を敷衍・発展させたものでもある。また、彼にとつては、中華革命党及びその後身たる中国国民党は中国における唯一の革命指導組織であったから、国共合作は、中国共産党員が

その党籍を保持したまま個人の資格で中国国民党に入党し、革命の遂行を援ける、という特殊な形をとった。この結果、中国国民党は革命指導中枢としての機能を有ちながら且つ幅広い人民の力を結集する統一戦線組織へと変化した。この変化は、五・四運動以来の民衆運動の拡大という社会情勢の変化と「新三民主義」の確立に代表される孫文自身の思想面の深化とによつてもたされたものであるが、私はさらに黄興の「単一大政党制」構想からの影響を指摘しておきたい。

(四)中華革命党以来確立された孫文の強力な指導力によつて支えられていた、組織的に特異な国共合作体制は孫文の死とともに動搖を始める。ブルジョワ革命派は、強力な指導者なき国共合作体制がもたらす党内の混乱及び革命運動の展開に対する主導権の喪失を恐れ、蒋介石という強力な指導者をつくりあげるとともに、中華革命党の先例にならつて「清党（不純分子＝共産党員、左派国民党員等の一斉排除）」を実行した。革命の唯一の指導組織である中国国民党は、統一戦線組織から一党独裁政体に変質し、ここに南京国民政府、蒋介石政権による軍事独裁体制が成立する。

以上は今後の論証を期している私自身の課題である。

- (1) 石田米子「最近の日本における辛亥革命研究の諸成果をめぐって」『東洋史研究』三九一―一号。
- (2) 安井三吉氏は統一戦線研究の弱点の一つとして、中国資本主義発達史や国民党史に関する体系だった論著の欠如を挙げている(安井三吉「アジアにおける統一戦線」歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題』第四冊、青木書店、一九七五年)。
- (3) 例えば狭間直樹氏の「共和制と帝制——辛亥革命における革命派の認識と行動——」(『東方学報(京都)』第四十二冊所収)では、武昌蜂起後の革命派の路線の推移を辿り乍ら、革命が中途半端に終わり、袁世凱への政權移譲を余儀なくされてゆくことの必然性を明らかにしようとしている。しかしここで扱われているのは、立憲派、袁世凱と相対する意味での、一括した形での革命派であって、革命派内部の各派の動向には触れられていない。
- (4) 『東京学芸大学紀要』第三部門、第二十四冊所収。
- (5) 『歴史学研究』四〇八号所収。
- (6) 『大阪学芸大学紀要』A―10、所収。のち同氏の『中国革命の史的展開』(汲古書院、一九七九年)に収録。
- (7) 坂野正高、衛藤藩吉編『中国をめぐる国際政治』(東京大学出版会、一九六八年)所収。
- (8) 山田辰雄氏は国民党史研究の意義を以下の如く指摘される。
 (一) 共産党史研究の成果を前提として、中国現代政治の欠落部分を補うこと。
 (二) 国共両党の対立的側面を解明することにより、各々の政治路線を中国現代史のなかで相対化して理解すること。
 (三) 国共両党の一致点と対立点を理解するにあたって、両者の対立の接点に国民党左派が存在すること。
 (四) 孫文研究に、本来の国民党史研究の一環としての視角を与えること。(山田辰雄『中国国民党左派の研究』慶応通信、一九八〇年、九―一三頁)
- 山田氏のこの指摘は、とりもなおさず日本の中国近現代史研究のあり方に対する批判であると言えよう。
- (9) 方志欽「論孫中山和黃興的關係」『辛亥革命史叢刊』第一輯(一九八〇年)。
- (10) 薛君度『黃興与中国革命』(香港三聯書店、一九八〇年)一四三頁。及び一八四―八頁。これは Chün-tu Hsieh, "Huang Hsing and the Chinese Revolution," Stanford University Press, 1961. の中国語訳(楊慎之訳)であるが、中国語本上梓に際し著者は増訂を行っており、また「紀念黃公克強並論辛亥革命」を附載する。英文原著については、狭間直樹氏の書評『東洋史研究』二十一卷一―号)参照。
- (11) 薛、前掲書、九〇頁。
- (12) 同盟会発足に際し、各団体内では、合同の度合いや新組織と既存組織との関係をめぐって、かなりの論議がかわされている。(菊池貴晴『現代中国革命の起源(新訂版)』敝南堂、一九七三年、一一九頁)
- (13) 松本英紀「中部同盟会と辛亥革命」(小野川秀美、島田度次編『辛亥革命の研究』筑摩書房、一九七八年)二〇五―六頁。
- (14) 鄒魯『中国国民党史稿』台湾商務印書館復印本(一九三〇

年頃初版)、七四頁。

(15) 宋教仁の打ち出した革命プログラムについては、松本、前掲、二〇八～二一〇頁、参照。

(16) 薛君度は、この孫文の地位低下について、革命の経過からみて自然のなりゆきとするともに、同盟会の収入が従来のように海外華僑からの送金に全面的に依存していた状態から国内での収取等によって相当額がまかなえるようになった点を指摘している。(薛、前掲書、一二七～八頁。)

(17) 史料的に相当問題があるので、あくまでも参考としておくが、サンケイ新聞社編『蒋介石秘録』第三卷(サンケイ新聞社、一九七五年)五九頁に、武昌蜂起後、新國家の総統への就任を請う電報を届けられた時の孫文の様子が描かれている。それによればイギリスの友人の一人から受けるつもりかと問われた孫文は「もし適当な人がいなければ、私になってもいいんだが……」と格別うれしがるでもなく答えた、ということである。編者は彼の謙虚な性格を顕彰したらしいのだが、これが事実とすれば、彼が已に政治上の実権を失なっていること、及びそれを彼が自覚していることを示す挿話であろう。孫文がうれしそうな顔を見せなかったのは、そのような自分に声がかからざるを得ないほど国内の情勢が緊迫していることを悟ったからであろう。

(18) 胡漢民「自伝」(中國国民党中央委員会党史史料編纂委員會編『革命文獻』第三輯所収)總四二五～四二七頁。

(19) 孫文が帰国する直前の同盟会の模様を、上海の吉総領事は「中心的人物ト称スベキ者ヲ缺ケル結果所謂彼等ノ団体トシテ

意志ノ存在ノ那辺ニ存スルヲ疑ハシ」む旨、本國政府に報告している。(明治四十四年十二月十九日在上海有吉総領事發内田外務大臣宛、機密第一一八号、『日本外交文書』七〇、清國事變、一一六頁)

(20) 池田誠『中國現代政治史』(法律文化社、一九六二年)、一〇三～七頁。

(21) この各省代表として参集した者の殆どは立憲派あるいは旧官僚に属する者であったという(松本、前掲、二二七頁)。

(22) 宋が早期に和議を推進した理由は、松本、前掲、二一六～七頁、参照。

(23) 池田、前掲書、一〇一～二頁。

(24) 松本、前掲、二二九～二三〇頁。

(25) 「同盟会革命方略」によれば、革命後の國家建設は「建國三程序」と呼ばれる三段階に分けて進められることになっている。即ち軍政府が國民を指導して旧弊を取り除く「軍法之治」、軍政府が地方自治権を人民に付与し、國民自ら國事に関与し始める「約法之治」、軍政府が解散し憲法上國家機構が國事を分掌することになる「憲法之治」の三段階である。これは孫文の終生の構想で、最晩年の「建國大綱」(一九二四年)にも盛り込まれている。最終的には民主主義体制を確立させるのだが、「約法之治」(のち「訓政時期」と改称)という、國民に「自由平等の資格を養成」させる期間、即ち軍政府による啓蒙時期が設定されているのが、大きな特徴である。「同盟会革命方略」では簡略に述べられているにすぎず、同盟会の組織にも実践をめざしての構造は見られない。しかし中華革命党以後、この三

程序は整備されるともに党の基本綱領に組み込まれるなど急速に重視されるようになる。中華革命党の党组织は、この三程序と不可分の関係にあるが、この点については別稿で論ずるつもりである。

(26) 一九一一年十二月二日、先述の各省軍政府代表者会議で正式に決定されている。(池田、前掲、一〇一―一二頁)

(27) 久保田、前掲、七頁。ただし久保田氏は孫文と宋教仁との拮抗に焦点をおくので、臨時約法の制定も宋派の妥協路線をくいとめるための抵抗と評価している。

(28) 久保田、前掲、一二―一三頁。なお併合された会派の綱領と同盟会のそれとの比較は、李劍農『戊戌以後三十年中国政治史』(中華書局、一九六五年)一五七―一五八頁を参照されたい。

(29) 以下の部分は、孫文の鄧沢如宛(一九一三年十二月二十日)、南洋同志宛(一九一四年二月四日)、鄧沢如宛(同年四月十八日)、李源水宛(同)、陳新政宛(同年六月十五日)、南洋洪門同志宛(同年七月二十九日)の各書簡に拠る。これらは全て、中国国民党中央委員会党史委員会編『國父全集』第三冊(中央文物供應社、一九七三年)、二八二―二九〇頁、に収録されている。宛先人は何れもマレー在任の有力華僑層で新党のPRがてら資金援助を求めするために書かれている。

(30) 註(10)参照。

(31) 李雲漢編、杜元載校訂『黄克強先生年譜』(中央文物供應社、一九七三年)一八四頁。(以下、単に『年譜』と称す。)

(32) 『年譜』一八八頁。

(33) 薛、前掲書、一〇九頁。

(34) 李書城「辛亥前後黄克強先生の革命活動」(左舜生『黄興評伝』附録、伝記文学出版社、一九六八年)一四〇頁。

(35) 同、一三七頁。

(36) 『年譜』二一〇頁。

(37) 胡漢民宛電報及び汪兆銘宛電報。羅家倫主編、杜元載增訂『黄克強先生全集』(中央文物供應社、一九七三年増訂版)一八七―八頁。(以下『全集』と略記)

(38) 汪兆銘宛電報、『全集』一八八頁。

(39) 菊池、前掲書、二二二頁。

(40) 李書城、前掲、一四二頁。

(41) 同前註。

(42) 松本英紀氏は前掲論文に於て「黄興の思惑はどうかといえ、宋教仁らの懇請に首をふらず、戦功のない自分の立場に苦慮し、今後は北伐の任に当るのみとつけ、大元帥には黎元洪が適任であるとまったく政治的配慮を欠いた態度を表明し、また臨時政府の首班には長年革命事業にたずさわってきた孫文こそまっ先に就任すべきであると表明するのであった。このような黄興の非政治的な態度はかえって宋教仁の工作をくるわせた」と述べ、黄興の言動に対し当惑と批判を呈している。しかし、黄興のこれまでの経歴を辿って来ると、私には当時の黄興の姿勢というのが至極自然なように思えてならない。黄は決して功績のないのを気にして逡巡し逃げ回っていたのではなく、「革命派」内の複雑きわまる勢力配置を考慮してのことである。黎元洪の推薦にしても、黎が今や「革命派」の有力な一員

となつてしまつて以上ここで黎の離反を招くような挙に出れば、それこそ「革命派」の分裂というように世間でとられて、ただでさえ不安定な不利な「革命派」の立場を一層苦しくすると考えたからではなからうか。黄興も黎の政治的志向を知らなかったとは思えない。「政治的配慮を欠いて」いたどころか、黄は余りに苦渋に満ちた「政治的配慮」を強いられたのだ、と言わねばならない。

- (43) 伍廷芳宛電報。『全集』一九八～九頁。伍廷芳は南北講和會議の南すなわち革命軍側の代表である。従つてこれは和議の促進を働きかけたものともいえよう。

- (44) 通電。『全集』二二二～三頁。

- (45) 『民立報』一九二二年四月十六日号にこの南京留守府の役割についての記事がある。南京留守府の意義については、薛、前掲書、一一六～七頁。

- (46) ジェローム・チエンは、民国初年の國家財政を困難たらしめている要因の一つが、革命によってふくれあがった軍事費であり、軍事費の削減——軍隊の縮少——が大きな政治的難題として横たわつていたが、結局満足に軍隊縮少を敢行し得たのは、黄興が指揮をとつた江蘇省くらいなものだった、と述べている（陳志讓『軍紳政權——近代中国の軍閥時期』香港三聯書店、一九七九年、二二頁）。

- (47) 薛、前掲書、一一七頁。

- (48) 同、一一六～七頁。

- (49) 通電。『全集』五八六～七頁。

- (50) 「在北京国民党歡迎大会演講」『全集』五二～三頁。

- (51) 「在北京共和党歡迎会答詞」『全集』五八頁。

- (52) 「在北京民主黨歡迎会答詞」『全集』六五頁。

- (53) 李劍農、前掲書、一六八頁。

- (54) 『年譜』三〇五頁。

- (55) 「対全体國務員及国民党籍議員演講」『全集』六六～七頁。

- (56) 孫文・黄興の北京訪問、及び袁世凱との會談は、「八大政綱」として孫、黄、袁に黎元洪を加えた四者の合意による協定成立という成果をもたらした。これにより、国民党と袁世凱との政争は鎮静化し、政局は安定する。（薛、前掲書、一二三～四頁）

- (57) 胡漢民、前掲、総四三〇頁。

- (58) 方志欽は前掲論文に於て、孫・黄關係の分岐の起点を宋教仁暗殺時においているが、首肯し難い。民国成立後の両者の言動を見る限り、薛君度の言うように、辛亥革命の時点に分岐の起点があることは明らかである。

- (59) 譚人鳳「石叟牌詞叙録」『近代史資料』一九五六年第三期、六九頁。

- (60) 薛、前掲書、一三二頁。

- (61) 毛注青編『黄興年譜』（湖南人民出版社、一九八〇年）、二四七～九頁所引の一九一四年五月末の孫文の黄興宛書簡及びこれに対する黄の返信に、宋教仁事件から第二革命中の軍事行動に至る間の両者の考え方の違いが示されている。

亡命先を日本に決めた孫文に対し、黄興はアメリカへの亡命を当初希望していた。が宮崎滔天の説得によって、孫文と同じく日本へ亡命することになる。この時点で両者の対立がもはや危険な状態にあったことが知られる（宮崎滔天、宮崎樾子宛書

簡。小野川秀美、宮崎龍介編『宮崎滔天全集』第五卷、平凡社、一九七六年、三九二～三頁。

- (62) 孫文は八月十八日に東京へ到着し、日本人志士たちに匿われることになるが、一ヵ月余り経った九月二十九日には最初の中華革命党党员五人を得ている。なお東京滞在中の孫文の動静に關しては、史料的な問題を別にすれば、車田讓治『日中友好秘録 君ヨ革命ノ兵ヲ拳ゲヨ——中國の父・孫文に生涯した一日本人——』（六興出版、一九七九年新版）二六六～三一〇頁、が参考になる。

- (63) 鄒魯、前掲書、一六三～四頁。

- (64) 居正の回憶によれば、孫文はこの宣誓書の内容を説明して「革命には必ず唯一人の崇高偉大な領袖があつてはじめて活動できるのだ」「革命党は船頭が何人もウロウロしていたり、互いに言い争つてはならず、必ず唯一最高領袖の下に絶對服従しなければならぬ」と言い、さらに「革命を再挙するには私しか居ない。……私を描いては他に革命の指導者は居ない」と断言した由である（居正「中華革命党時代の回憶」、前掲『革命文献』第五輯八二頁）。また李書城は「孫先生はわが党の敗北の原因を党员が自分の言うことに従わなかつたためだ、とし、さらに黄先生はその点格別責任は重いと見做していた」と記している（前掲、一五四頁）。

- (65) 居正、前掲、八二頁。

- (66) 邵元冲述、許師慎筆録、「中華革命党略史」、前掲『革命文献』第五輯、九八頁。

- (67) 孫文宛黄興書簡（一九一四年六月初）、前掲『黄興年譜』二

四九頁。

- (68) 張繼「回憶錄（一）」（中華民國各界紀念國父百年誕辰籌備委員會主編『革命先烈先進詩文選集』第五冊、中央文物供應社、一九六五年）総二九九六頁。

- (69) Friedman, Edward: *Backward Toward Revolution——The Chinese Revolutionary Party——* University of California Press, Berkeley, 1974. pp. 58～59. これは中華革命党に対する数少ない専論である。本書について私は嘗て書評を行なっている（『アジア・クォーターリー』三四号）ので内容の詳細は拙文を参照されたい。

また李書城によれば、黄興は一度胡漢民及び汪兆銘に対し孫文に再考を促すよう進言するよう依頼したが、兩人とも翻意させることはできなかった、と記している（前掲、一五四～五頁）。

- (70) 宮崎民藏宛書簡、前掲『宮崎滔天全集』第五卷、二九四頁。

- (71) 前掲の居正、邵元冲、李書城らの回憶、黄興の孫文宛書簡により構成。

- (72) 「中国同盟会総章」第五条に「凡そ国人の立てる所の各会党、其の宗旨本会と相同じくして聯りて一体と爲るを願う者は概て認めて同盟会會員と爲す」とあり、主義を相等しくする者に広く会の門戸を開いている。宋教仁の国民党組織もこの条項を拡大したのと言えなくはないし、黄興の国民党を母体とした第一大政党组织も同盟会のこの組織原理を極限にまでひろげたものである。

- (73) 註(67)に同じ。

(74) この点については、寺広前掲論文に不十分ながら言及がある。私も中華革命党組織を扱った別稿で論ずる予定でいる。

(75) 孫文は、一九一四年五月末の黄興宛書簡で「君と僕とはやはり主張が異なるのだから、君が（中華革命党に）入党してくれないのも当然だ」とさっぱりした態度を示している（前掲『黄興年譜』二四八頁）。中華革命党成立時における孫文の独走と強硬の背景には、陳其美ら上海を地盤とする江浙系グループの存在があったようである。陳其美は同盟会初期からのメンバーで、後に中部同盟会の主要人物の一人として上海光復に功績をあげる。しかし、民国成立後、孫文の演説をきいて甚だ感激、爾来孫文の命にのみ従うと決心した男である（邵元冲、前掲、九九頁）。孫が中華革命党組織を計画した時、真つ先に賛成したのは彼であり（居正、前掲、八二頁）、黄興との間に一旦は成立した妥協案を御破算にさせたのも陳である（『年譜』所引李徳沢「中華革命党外記」、三六五―六頁）。さらに名指しこそしていないものの孫文側近グループの介在が事態を一層こじら

せた旨、黄興や宮崎滔天が書きのこしている（黄興「对梅培談話」『全集』一―四頁。宮崎滔天は註（70）に同じ）。また中華革命党は孫文にしては珍しく上海での活動に重点をおいているが、これは陳の影響であるという（Friedman, *op. cit.*: Chap. IV）。因みに蒋介石はこの陳其美の配下であり、陳を介して孫文の知遇を得る。従来広東人が圧倒的だった孫の周辺に江南人が急速に増えてくるのもこの頃である。後の蔣政権下で不断に存在した江南閥と広東閥の内訌（蒋介石と胡漢民の対立、蒋介石と汪兆銘の対立等）の火種が作られるわけである。中華革命党を考察するうえで、陳其美の問題は避けて通れぬ課題である。

（補註）この選挙の模様に関しては、狭間直樹「中華民国第一回国会選挙における国民党の勝利について」『東方学報（京都）』第五十二冊）を参照されたい。

（たかはし よしかず 名古屋大学大学院博士後期課程）